

APBA News

第4号

特定非営利活動法人 アジア
失明予防の会（文責 竹岡）
<http://www.asia-assist.or.jp/>
APBA2010@gmail.com

「服部先生の活動予定（9月～11月）」

- ・各月ともハノイ国立眼科病院、ハノイ市立眼科病院、フレンドシップ病院等にて眼科医療技術の教育・指導を実施予定。
- ・『Save the Vision』プロジェクトの予定

9月

- ・ニントアン省のアイセンターにて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施予定（70人）
東海大学の石橋医師が参加予定

10月

- ・ティンクアン省の総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施予定（70人）

11月

- ・ピンフック省の総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施予定（80人）

「服部先生の活動実績報告（4月～8月）」

- ・各月ともハノイ国立眼科病院、ハノイ市立眼科病院、フレンドシップ病院等にて眼科医療技術の教育・指導を実施。

- ・各月の『Save the Vision』プロジェクトの内容。

4月

- ・タイグエン省の総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施（62人）
看護師の竹下さん、福岡さん、佐野さんら3名と奥村さんがボランティア活動に参加

5月

- ・ティンクアン省の総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施（62人）

6月

- ・クアンニン省のイエンフン総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施（80人）

7月

- ・カインホア省の87病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施（87人）
栗原医師、看護師の竹下さん、佐野さん、福岡さんがボランティア活動に参加

8月

- ・クアンニン省のドンチオ総合病院にて貧しい人々に対して無償の白内障手術を実施（68人）
寺井医師、看護師の中村さん、坂本さん、伊東さん、島田さん、看護学生の中村さんらがボランティア活動に参加

- ・その他に、6月にベトナム人バイオリニスト、ハノイボランティアネット、Vina Boo共催によるチャリティーコンサートに出席。



緑色：タイグエン省

赤色：ティンクアン省

紺色：クアンニン省

黄色：カインホア省

「アジア失明予防の会」総会予定のお知らせ

平成22年度の「アジア失明予防の会」の総会が以下の通り開催の予定です。まだ少し先ですがご予定に入れ、ご出席の上、皆様のご意見をお聞かせいただければ幸いです。

日時：平成22年11月04日（木）18時30分～

場所：京都府立医科大学 基礎校舎3階

「服部先生から地方での活動のお便り」

1. タイグエン(Thai Nguyen)省での活動紹介

今回はハノイから80キロ離れたタイグエン省の総合病院にてチャリティーを行ってきました。このプロジェクトには日本から、看護師の竹下さん、福岡さん、佐野さん、それから週末だけ社会人の奥村さんが参加してくれました。竹下さんは昨年度の地方のチャリティー活動に2度参加していることもあり、また手術室の看護師もあるので、即戦力として大活躍でした。



リストを見ながら、待っている患者さんの体の具合や手術眼の状況をチェックしたり、患者さんやその家族とコミュニケーションをとりながら不安を和らげることも大きな役割の一つです。徐々に慣れてきて片言のベトナム語を話せるようになります。その場の雰囲気もぐっと明るくなります。

このおばあちゃん、眼がほとんど見えなくなつてもう10年以上経つそうで、家族がいつも付き添いで食事をしたり、散歩をしたりという状況でした。

両眼とも過熟白内障と言つて水晶体が真っ黒になつてました。日本で有名な那智黒といふ餡がありますが、あのような感じです。両眼とも手術を行い、見えるようになって、こんなに世の中が明るいのかとおばあちゃんは叫んで、家族ともども大喜びで退院してきました。

現地医師に手術の指導しているところです。日本の病院では当たり前のように装備されている側視鏡

(助手用の顕微鏡)が付いていないので、傍に付いて肉眼で手術を見学します。あまりにも傍で見学するために、荒い鼻息が耳元に降りかかることがあります。移動中に顕微鏡に当たり、顕微鏡が揺れることもしばしばです。そんなことに文句を言つては現地では手術ができません。

午後1時から歓迎昼食会の予定でしたが、手術がなかなか終わらず、3時過ぎまで現地の病院幹部らを待たせてしまいました。そのためか普段よりも多く

酒を注がれることとなり、万事休です。乾杯を重ねている内に目が回り、気がつくと私は隣の従業員の控室で横になって意識を失っていました。ベトナムでは乾杯して、コップをあけて握手するのが通例となっていますので、いつも大変です。

2. クアンニン(Quang Ninh)省イエンフン(Yen Hung)での活動紹介

ちょうど季節は稲刈りのシーズンで、刈ったばかりの稻が干されていました。ベトナムでは二期作が当

たり前で、6月と11月が収穫の時期に当たります。ベトナムの南部では三期作のところもあります。ベトナム主食はコメで、どこで食事を呼べれても、最後にはスープとご飯が出

ます。日本人にとってはちょっと癖のあるご飯ですが、スープやお漬物などと一緒に食べるとそんなに気になりません。

クアンニン省の地方、イエンフンという地域の病院です。こうした田舎の病院には眼科がありません。



眼病になれば、クアンニン省の省都のホンガイの総合病院に行くか、ハノイに行かなければ、眼科の診療は受けられません。土日ということもあり、病院全体は閑散としていましたが

眼科の診察や手術をしているエリアでは人でいっぱいでした。

一つのベッドを二人のおばあちゃんが共有しています。狭いところで申し訳ないのですが、ベトナムではこのような様子はハノイの病院でも一般的となつ



ています。日本では白内障手術は日帰りで行われますが、遠くから噂を聞きつけて、来院する患者さんも多く、1泊か2泊して手術後の状態が安定してから退院してきます。退院

した患者さんは、調子が良ければそれ以上診察を受けに来ることはありません。

手前で手術をしているのはDuc医師です。昨年の今頃は、ボランティアグループの新入りで、外回り、荷物持ち、手術の準備・後かたづけなどアシスタン



トが主な業務でしたが、どんなに辛い仕事でも彼は進んでやってくれます。そんな彼も成長し、今や立派なサーチャンとなりました。彼のお気に入りの日本食は

生牡蠣です。日本に研修へ行った時に、最初に食べた料理が生牡蠣でおいしくて忘れられず、それ以来どこに行ってもまず注文するのは生牡蠣です。

3. ハノイで開催されたチャリティーコンサート

ハノイボランティアネット主催、ベトナムの無料情報雑誌ビナB00の協賛により、ハノイのソフィテルメトロポールホテルにてチャリティーコンサートが開催されました。日本人以外にも多くの国の方々が参加されました。メインはベトナムで最も有名なバイオリリストのDuyさんによる演奏でしたが、前座に



Huongさんのピアノ演奏、ボーカルのDungさんによるオペラさながらの歌の披露、クラリネットのQuangさんとDuyさんの共演など、それは素晴らしい演奏会でした。

この演奏会のあと、チャリティーオークションも開催されました。メトロポールホテルのジェネラルマネージャー自らが、司会をして盛り上げました。本物のオークションかと思うくらい、話術が巧みで会場は熱気にあふれていきました。参加した方々が、その値段に臆することなく、次々と商品を落札しているのを見て熱いものを感じました。こんなチャリティーパーティーがあるのであれば、何度も参加したいと思うパーティーでした。毎年このように趣向を凝らしたチャリティーにより寄付していただくことに頭が下がる思いです。

4.ハノイ国立眼科病院での手術

ハノイ国立眼科病院は、この時期は患者さんで溢れ返っています。眼科治療ではベトナムでトップの病院であるために、全国から患者さんが集まっています。どの診察室も順番待ちの列一杯です。医師も一生懸命に診療を行っていますが、行ったその日に診療を受けられないこともあります。



3日も待たされている患者さんもいました。エアコンもないところで、団扇を仰ぎながら、じっと待っている姿を見ているとベトナムの人の忍耐強さには頭が下がります。



今回の滞在では未熟児網膜症の子供の手術を数多く手がけました。ベトナムでは、1500グラム以下で生まれた子供も、新生児医療(NICU)の発展により保育器を用いて、成長できるようになってきました。しかし、特に低体重児において未熟児網膜症を発症する率が高く、ステージ5へと進行した子供が多くいます。ステージ5になると網膜が朝顔の花のように固く縮んでしまい、手術をしても助かる率はかなり低いのですが、ベストを尽くすしかありません。

ボランティアに参加された方からの便り（抜粋）

看護師 佐野 桐子さん

ベトナムの第一印象は、社会の教科書で見た、昔の日本という感じでした。そして、ベトナムでは驚きと、日本で育った自分がとても恵まれているなあと感じる毎日でした。

診察・治療のお手伝いをさせていただいている時も、日本の医療現場との違いに驚きました。ベトナムの病院では、一日でこんなに多くの人たちの診察ができるのだろうかという程、廊下に診察を待っている人たちがあり、日本では、受け付けをしたら、順番に診察室に呼ばれるのに、順番もなく、早く診てもらおうとどんどん、診察室に入ってくる患者さんに驚かされました。

また、道具が古いこと、整っていないことなどに驚きました。私が、日本で医療に携われていることが、どれだけ、恵まれているかを実感しました。

地方でのボランティアに参加させていただいたて、地元住民の方々の笑顔が印象的でした。OPE前までは、緊張していた人たちが、翌日、先生たちが術後診察している時は笑顔でいて・・・その家族も笑顔で・・・とても素敵な光景でした。

看護師 福岡 一美さん

知らない土地で手術介助をさせてもらったり、色々な病院を見せていただいたり、すごく貴重な経験をさせて頂きました。言葉は通じなくても、伝えようと思えば伝わるということがわかりました。医療も看護も国が違っても同じだけど、その国の文化や習慣によって、やり方が違い、何が正しいとかでなくその国に合ったスタイルがあると思いました。これからも色々な考え方につれてみたいと思いました。また、一人で活動を続けられている先生の姿が、ただただスゴイと感じ、参加したいという私も受け入れてくれる心の大きさを実感しました。

帰るころには蒸し暑く活気のあるベトナムが好きになっていました。今後も参加したいと思います。そして、先生の素晴らしい活動を私の周囲に伝えていきたいとおもいます。

「賭博とサッカー好きのベトナム人に犬も犠牲？」

「犬がいない！」中部ダナン市の女性リエンさんが、帰宅すると、愛犬が消えていた。700万ドン(約3万円)もした洋犬だ。リエンさんは公安に駆け込み、「子豚のように丸々したかわいい犬で……」と、涙ながらに探してほしいと訴えた。ここベトナムは、散歩中の犬が飼い主の目の前でさらわれる犬泥棒横行の国。盗まれたと思うのは当たり前。公安の調べでまもなく、犬をかわいがっていたはずの息子(19)が犯人とわかった。違法なW杯賭博で金をすり、それでもやめられず愛犬を300万ドンで売り払い、その金でさらに……。W杯賭博を原因とする自殺や強盗が相次いでいるベトナムだが、犠牲はペットにも及んだ形だ。